

## PROJECT 「探究」を次のステージへ『探究2.0』を共創する対話の場



東京学芸大学  
高校探究プロジェクト

探究的な学びの実践コミュニティ拡大支援プログラム  
オンラインセミナー

**探究のアップデート  
『探究2.0』を共創しよう**

**2026.3.7sat  
15:00-17:00**

冒頭の趣旨説明では、本プロジェクトの西村リーダーより、「深く掘り下げる探究」や「地域課題の解決をめざしたプロジェクト的な探究」に深く取り組ませる学校がある一方で、総合型選抜のための実績づくりが目的であったり、活動が形式的・形骸化してしまい、生徒や教師が前向きに取り組めていないケースが散見されるという課題が語られました。その上で、「この背景には主に2つの現状があると感じています。1つは教員が『総合的な探究の時間』に何かしらの『型』を求めて、その『型』にあてはめようとしている現状。もう1つは、探究はもともとモチベーションの高い人がやるものと一部の生徒や教員が思ってしまった現状。こういった現状を打破するアプローチとして、多様な嗜好・志向や得手不得手をもつ人が集う学校教育で行うからこそその探究の姿=対話志向で、他者に開かれた『探究2.0』を創り出すことが必要だと考えています。『探究2.0』を一緒に実践・創り出していく仲間を増やしていきたい。これが本セミナーの大きな目的です」と説明されました。

そして、高校生から投げかけられた「探究活動に取り組む際、探究を『他者に開かれた学び』にしていくために、高校生としてはどのような姿勢を意識するとよいのでしょうか。」という「問い」を共有し、基調講演、パネルディスカッションに入っていました。

2026年3月7日（土）に、オンラインセミナー「探究のアップデート『探究2.0』を共創しよう」を開催しました。全国の高校生、教員、研究者、企業関係者などさまざまな立場の方から300名を超えるお申込みをいただき当日を迎えました。

高校探究プロジェクトではこれまで、学びの当事者である高校生の声を出発点に、多様な立場の人々が対話を通じてつながり、「探究」について共に考える場や機会を生み出してきました。

本セミナーでも、申込時に高校生から届いた以下のような率直な声を紹介し、こうした声を出発点として、これからの探究の可能性について参加者と共に考えていきました。

### 高校生から届いた声

受験のための学習を優先させてしまい、探究にまで時間を使えないことが課題かと思っています。今後日本の教育がどのようなゴールを見据えているのかが興味があり参加を希望しました。

自校の探究活動があまり価値のあるものではないように感じているため、より良いものしたいと考えました。

高校での探究活動が形式的になってるのはと疑問を感じ、「探究2.0」という考え方に興味を持ちました。探究をより深い学びにする視点を学びたいと考え、参加を希望します。

探究学習において、個人・学校内のみに留まらずに、意欲的に外部と関わっていくには、生徒・教員はそれぞれどのように取り組む・アシストしていけば良いのか興味を持ったため、本セミナーに参加を希望します。

探究は周囲の友人や先生、家族が協力と応援してくれたおかげで達成できたことが山ほどありますが、「手伝い、ではなく同じ探究を頑張る仲間に出会えることが少ない」です。いいライバルやお互いに同じ刺激し合える人に中々出会えないことに課題を感じています。

現在の高校の探究学習では、地域ごと・学校ごとで、取り組み状況やその内容に差があるように感じられますが、今回お話しした『探究2.0』を、全国的に、いち早く普及させるビジョン・目標はどのようなものでしょうか。

### 学校教育で行うからこそその探究の姿



対話志向で、他者に開かれた『探究2.0』

### 「探究2.0」へのアップデート

#### ◆人材開発から組織・社会開発へ：

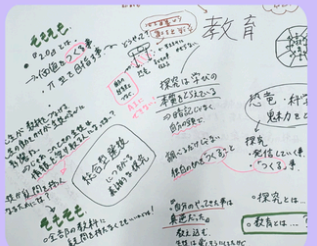
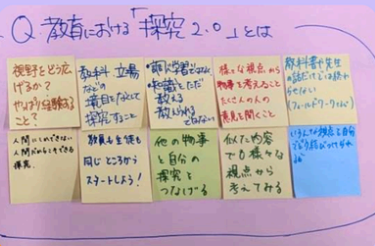
「あれもこれも自力でできる個人の育成（人材開発）」を目指すのではなく、「凸凹（強みや弱み）のある者同士をいかに組み合わせるか」を試行錯誤する「組織開発・社会開発」の視点へと転換を図ります。

#### ◆楽しさと価値創造：

嗜好・志向や得手不得手の異なる多様な仲間が、教科の学びを対話に活かし、楽しみながら新しい価値を創造する姿を目指します。

### 高校生を中心に多様なメンバーで対話

探究の共創  
in  
Winter



## 第1部 基調講演

### OECDティーチング・コンパスを紐解く

OECD教育スキル局政策アナリスト 田熊美保氏



最初に、「OECDラーニング・コンパスとティーチング・コンパスはどのようにつながっているのか?」という高校生からの「問い」を受けて、田熊美保氏よりご講演いただきました。

#### 1. ティーチング・コンパス (TC) の背景と意義

田熊氏はまず、「ティーチング・コンパス」がどのようなプロセスで誕生したかを説明されました。

- 国際的な共創：50カ国以上から、政府関係者だけでなく、教員、研究者、NPO、そして当事者である生徒・学生が参加し、**10年近くかけて対話を重ねて作成された。**
- ラーニング・コンパスとの両輪：2019年に公表された生徒向けの「ラーニング・コンパス (学習の羅針盤)」に対し、それを現実の学習環境で実施可能にするための教師側の指針として策定された。
- 日本の貢献：日本の教育実践や野中郁次郎氏の「知識創造理論 (暗黙知・形式知)」などが国際議論に大きな影響を与えており、日本にとっても馴染み深い概念が多く含まれているとのこと。



#### 具体的事例：輪島高校の「現実の教科化」

アンカーを降ろした教師たちがどのように「探究」を実践したかの象徴的な例として、震災後の石川県立輪島高校の事例を紹介されました。

- **トラブルを学びに変える**：トルコから訪日予定だった一行が、国際情勢の影響で急遽来られなくなった際、校長は通常の授業に戻すのではなく、「この現実をネタに授業をつくってください」と教員に依頼されました。
- **即興の教科横断型授業**：わずか40分で、7教科の教員がそれぞれの専門性 (数学：フェルミ推定、物理：ステルスのメカニズム、商業：株価への影響など) を活かした授業案を作成し、**世界で起こっている事実を複数の「教科のメガネ」で捉える授業が構想されました。**
- **示唆**：これこそが教師自身が探究し、その姿を生徒に見せる「Being」の体現であり、「現実が教科書になる」瞬間に立ち会えたと述べられました。

#### 2. ティーチング・コンパスを構成する6つの概念

ティーチング・コンパスは、以下の6つの主要な概念で構成されています。①教育の目的の再定義：2040年に向けた個人・社会・地球のウェルビーイングの実現。②アンカー (錨)：変化の激しい時代でもブレない自分軸。「Being」「Belonging」「Becoming」の3要素。③教師エージェンシー (主体性)：個人だけでなく、集団としての主体性を重視。④教師コンピテンシー：知識・スキル・価値観・態度の統合。⑤教師のウェルビーイング：身体的、社会・感情的、認知的な健康。⑥学びのエコシステム：教師、生徒、技術、地域社会が相互に関わる環境。



#### 3. 本日の焦点：アンカー (錨)

教師がアンカーをおろし、自分らしくあるための、3つの要素について詳述されました。

- ① **Being (存在・自己認識)**：教師が専門職としての「矜持 (アイデンティティ、尊厳、誠実さ)」を持ち、自分らしくそこに「ある」ことを指します。教師エージェンシーの出発点。
  - チェックリストやマニュアルに頼るのではなく、専門職として自ら判断し、人間らしく生徒と向き合うことが、教育実践の安定と力強さの源である。
  - 自己効力感が重要であり、これを持つ教師ほど、カリキュラムを柔軟に実施する裁量権を実感できる傾向にある。
  - 「自己認識 (Self-Awareness)」「自己内省 (Self-Reflection)」「セルフケア (Self-Care)」の3Sサイクルを回すことで、教育の質・専門性が向上する。
- ② **Belonging (所属感・関係性)**：教師にとっての学校が、心理的安全性の高い「居場所」であることを指します。
  - 同僚、校長、生徒、地域社会との「関係性の質」が重要。
  - 特に対話を通じて互いの力を引き出し合う関係性が、教師の安心感と実践の持続可能性を高める。
- ③ **Becoming (成長・変容)**：経験や対話を通じて常に成長し、変容し続けるプロセスを指します。
  - 主体的・協働的な学びを継続し、「予測・行動・振り返り (A-A-R) サイクル」を回し続ける姿です。

#### 「探究2.0」への接続

最後に、これらの概念を「探究2.0」へとつなげる視点が示されました。

- **形式からの脱却**：生徒の成長が目的。探究も手段のひとつ。入試のための実績づくりや形式的な対話ではなく、問いが揺れ、前提が崩れるような深い原体験を伴う学びを実現することが重要である。
  - **協働の習慣化**：週に1回以上、同僚と協働 (研究授業や授業参観など) している教師ほど自己効力感が高いというデータもあり、教師自身が協働を通じて学び合う場をつくりだすことが大切になる。
- このように、田熊氏は、教師が「どう教えるか (Teaching)」の前に「どうあるか (Being)」を問い直し、多様な他者とのつながり (Belonging) の中で成長 (Becoming) し続けることが、「探究2.0」へのアップデートにつながる鍵であると締めくくられました。

## 第2部 パネルディスカッション



パネルディスカッションは、三菱みらい育成財団の常務理事 妹背正雄氏による話題提供から始まりました。妹背氏は、全国313校の高校への助成実績（下図）に基づき、探究の核心は生徒の「心のエンジン」を駆動させることにありと強調されました。

- 着火のポイント：「本気の大人」や社会課題の現場との出会い、そして教科学習や進路指導を含めた全面的な探究化が重要である。
- 持続：学年を越えた学び合いの仕組みづくりや、教員が「教える・指導する」ことを手放すことが鍵となる。
- 企業・社会の視点：銀行員としての経験から、ビジネスの現場でも「なぜ？」という問いの持ち方によって、対話の深さが変わる。激変する時代において、企業も個人も、持ち場で自ら考え、学び続ける力が必要となる。
- 大学教育との対比：高校は専門性の異なる教員や多様な関心を持つ生徒が混在していて「総合知」を育むのに非常に適した環境である。高校生活という「今」を大切にしたい。



妹背氏の提言を受け、本プロジェクトの活動報告を通じて、具体的なコミュニティづくりの実践を共有しました。

- 指導主事によるコミュニティ「チームわくわく」：広島県から始まった地域を越えた協働・共創コミュニティの事例を報告しました。1人の指導主事の想い（Being）が、仲間との繋がり（Belonging）を生み、コミュニティが拡大・成長していく様子（右図）とともに、「チームわくわく」から細胞分裂のように新しい研修プログラム開発チーム（子チーム・孫チーム）が結成されつつある現状を紹介しました。
- 教科に根ざした「授業研究」：地歴科や数学科などの教科別チームによる全国規模のオンライン授業研究の成果を報告し、異なる学校や校種の教員が共に指導案を練り、生徒の学びの実相を詳細に見取るプロセスを通じて、教員の専門性と自己効力感が高まっている様子を紹介しました。

「探究2.0」体験	
フェーズⅠ	
①	あるテーマやトピック（例えば、「水」「茶」など）に対して、自分の好きな教科の視点から「問い」を思い出す。
②	小グループで、①で見出した「問い」と、その「問い」に込めた想いや背景について対話する。
③	②の対話をもとに、クラス等で数時間かけて取り組む「大きな問い」をつくる。
フェーズⅡ	
④	③の「大きな問い」に対して、教科ごとのチームに分かれ、以下のことを検討する。 ・この教科の視点や方法で、どのようなアプローチが可能か。 ・そのアプローチによって、どのような結果が得られそうか（複数）。（調査や試行をする場合もある。）
⑤	複数教科に及ぶグループで、④の検討結果を持ち寄り、「大きな問い」に対する「答え」や「行動」を練り上げ、「探究シナリオ」としてまとめる。
⑥	他のグループと「探究シナリオ」を批判的に検討し合い、リスクと可能性等を顕在化する。
⑦	「大きな問い」の探究プロセスを振り返る。

● 校内ワークショップの仕掛け「探究2.0」体験：「お茶」などをトピックに設定し、異なる教科の視点から問いを立てる校内研修の手法（上図）を紹介しました。これにより、教員が自らの教科のメガネを意識しつつ、他教科と「わちゃわちゃ」と対話する場（Belonging）が生まれます。こうした場合は「探究2.0」を体感する機会となり、教科横断型の新たな探究教材を生み出す土壌になることを提案しました。

### ティーチング・コンパスと「探究2.0」へのアップデート

活動報告を基に、議論を理論的な裏付けを伴いながらこれからの「探究のあり方」へと深めていきました。

- ティーチング・コンパスの「アンカー（錨）」との接続：田熊氏は、報告された実践が、いかに「Being」「Belonging」「Becoming」という3つの要素を体現しているかを解説し、教師自身が心理的安全性の高い居場所を持ち、自らを探究者として位置づける（Being）こと、その姿そのものが、生徒の主体性を引き出す源泉になると結論づけられました。
- 外部機関との「共創」：近畿日本ツーリストとの連携による「修学旅行の探究化」の事例では、修学旅行も教科横断型の探究の場であることを共有し、企業もまた「共に社会を創る仲間」として対等に参画する姿を提示しました。従来の「人材開発」から、多様な凸凹を持つ者同士が試行錯誤する「社会開発」としての「探究2.0」への転換に向けた議論となりました。
- ポジティブ・アプローチによる未来の共創：パネルディスカッションの締めくくりとして、足りないものを埋める「ギャップ・アプローチ」ではなく、「ありたい社会」や「明るい未来」を内側から描き、その実現に向けて何ができるかを考える「ポジティブ・アプローチ」の重要性を共有しました。そして、立場を越えた多様な仲間が対話を起点に、楽しみながら新しい価値を創造し続けるプロセスこそが、プロジェクトの目指す「探究2.0」の姿であると再確認して終了しました。



# ブレイクアウトセッション 「『探究2.0』の実践コミュニティとは」

全体プログラム終了後、希望者を対象に20分間のブレイクアウトセッションを実施しました。このセッションでは、立場や地域、年齢を超えた多様なメンバーで構成されたルームにおいて、「対話のルール」を基に「『探究2.0』の実装コミュニティとは」というテーマで自由な意見交換が行われました。

## 1. 現場の悩みと「開かれた探究」への模索

あるグループ（下図「議事録」参照）では、高校生から「学校内でのグループ探究が混乱し、間に合わせの活動になってしまった」という切実な失敗談が共有されました。そこから「開かれた探究」について現実的な課題が議論されました。

### 議事録

高校生：「開かれた探究」をするにはどうすればいい？  
という点が気になったので参加  
↑学校内でグループ探究を行っているがゴタゴタで間に合わせの探究になってしまった..

とある学校：みんな同じテーマで水質調査等⇒データを使って地域に還元していく。  
探究の成果が社会にもっと出せるようになっていくように大人が価値づけをしていきたい。  
外部と協働していく部分が現時点の高校生の探究の課題なのでは？→手続きを考えると時間がかかる...  
広島県の実践の例  
⇒移動が多くなっている中で近年実装コミュニティに頻繁になっている「地域」に定める難しさが今後出てくるのでは？  
⇒ネット等いくつかバリエーションがあるけどな

### 探究2.0の 実装コミュニティとは

⇒Belonging、「所属」が大切  
それがあるT型の探究につながる  
立場にこだわりすぎずに行う。

メンバー：高校生2人、大学教員、広島教育センター所属の方

## 2. 「Belonging（所属感）」の再定義

対話を通じて、実装コミュニティには「Belonging」が不可欠であるという結論が導き出されました。

- 地域という枠組みがある中で、オンラインなどのバリエーションを含めた新しい「所属」のあり方・カタチが模索されました。
- 安心できる居場所（Belonging）があることで初めて、自分の専門性を他者と掛け合わせる「T型の探究」が可能になるという認識が共有されました。
- 対話においては「立場にこだわりすぎない」ことが大切であるとされました。

## 3. 「問い」を育むための環境と仕掛け

「探究2.0」を実装するための具体的なアイデアやハードルが可視化されました。

- 教員の在り方：「教員が教えることに慣れてしまっている」という現状への自省や、教科の枠を越えて集まることの重要性が語られました。
- 心のエンジンと対話：自分のモチベーションが大切だが、自らの「心のエンジン」を見つけることの難しさに対し、仲間同士のゆるいつながりからの対話やAIだけでなく他者の意見との壁打ちといった手法が提案されました。
- 問いの立てやすさ：問いを立てやすくするための話題づくりや、個人の政治的な意見と世論の関係をどう扱うかといった深いテーマも議論の対象となりました。

本セミナーは、参加者一人ひとりが自らの「ありたい姿（Being）」を問い直し、文化的背景の異なる多様な人々が「探究」という共通言語でつながる場となりました。その「つながり（Belonging）」の中で新たな価値を共創していく営みこそが「探究2.0」であるという実感が共有され、次の実践へとつながる確かな一歩となりました。

## 参加者から届いた声より

アンケートへの回答から、本セミナーが、参加者にとって「探究に対する既存の価値観（メガネ）のアップデート」と「立場を越えた対話による心理的安全性の獲得」という2つの側面で価値ある場になったと実感しています。

### 1. 探究の本質への気づきと「学習観のアップデート」

これまでの「正解を求める型」や「形式的な実績づくり」としての探究から脱却するきっかけを得られた様子が見られました。

- 高校生：「探究は答えを求めるものではなく、より良い選択肢を考え続け、実生活を豊かな視点で見つめることだと気づいた」という変容のコメントがありました。
- 教員・研究者等：「従来型の学びのメガネ」を外し、自分を含めたあらゆる人々の学習観をアップデートする必要性を痛感したという声が多く挙がっていました。

### 2. 「アンカー」概念による自己と関係性の明確化

「Being」「Belonging」「Becoming」というアンカー（錨）の概念は、現場の悩みに対する強力な指針として受け入れられたと感じています。

- 自己肯定感と自信：ぼんやりと感じていた自分自身の「あり方（Being）」と「つながり（Belonging）」の相関がクリアになり、教師自身の自己効力感を高める重要性が再認識された様子でした。
- プレない軸：変化の激しい時代においても、自分軸を「錨」として降ろすことの重要性が、多くの教員の腹落ち感（納得感）につながったと感じています。

### 3. 学校の垣根を越えた「Belonging」による孤立感の解消

アンケートでは、校内で孤立しがちな探究担当教員が、外部のコミュニティとつながることで大きな励みを得た様子も見受けられました。

- 心理的安全性の獲得：地域や立場を越えた対話を通じて「心理的安全性の高い場」を実感したという声が多くあがっていました。
- 外部との共創：「修学旅行の探究化」など、学校外の企業や社会人と対等に「共創」する姿が、現場の新しい可能性として高く評価いただきました。

### 4. 立場を越えた「共通言語」として「探究2.0」の可能性

ブレイクアウトセッションを通じ、高校生、教員、研究者、社会人が対等に話し合うプロセスそのものが、新しい学びの形「探究2.0」として体現された様子でした。

- 多角的な視点の共有：異なる地域の高校生や教員から多様な意見を得られたことに「ありがたかった」という声が寄せられ、立場や環境の違いを越えて人々をつなぐ「共通言語」としての「探究2.0」の可能性を感じています。
- 次なるアクションへの意欲：アンケート回答者の多くが、次年度の「探究の共創」イベント（下図参照）への参加や、自校・自組織での実践、プロジェクトとの共創を具体的に希望して下さっており、本セミナーが単なるインプットの場ではなく、次なる「行動（Becoming）」への新たな起点となったと実感しています。

高校探究プロジェクト

## 探究の共創 2026 開催告知



7月20日（月・祝）

in Winter 12月20日（日）

参加者・引率者対象の「探究2.0」に関する勉強会を開催し、本イベントの趣旨や意義の共有

